

次の文章をよく読み、9ページの地図を見て、7ページから8ページにある問いに答えなさい。

あつというまに一学期も終わり、明日からは小学校最後の夏休みが始まる。開放的な気分になりかけるのとは裏腹に、少しだけ夜のことが気になっていた。終業式の夜は、近所に住んでいるおじいちゃんの家で、家族で夕ご飯を食べに行くことになっている。もらったばかりの通知表をみんなで眺めて、あれこれとしゃべりながらお茶でも飲むんだろう。毎学期のことだとはいえ、楽しみな行事というわけにはいかない。それでも今学期の成績なら……という手応えもあった。

「なかなかやるじゃないか」

感心したようにおじいちゃんが息をつく。

「いやあ、これだけできるなら大したもんだ。おまえの父さんも成績は悪くはなかったが、ここまでじゃなかったような気がするな」

おじいちゃんの言葉に父さんが身体を起こす。

「親父は孫には甘いからなあ、おじいちゃんの言葉を真に受けるなよ」

まるで本当は自分のほうが成績が良かったと言わんばかりの父さんの様子を見て、ちょうどスイカのおかわりを持ってきたおばあちゃんが笑いをもらす。

「昔の通知表なら残っているわよ。持ってきてみましょうね」

意味ありげに笑いながら空になった皿を取り上げると、おばあちゃんは足音を残して部屋を出て行った。

「まったく……。昔から教育ママだったからな。いらぬものばかり残しているんだ」

余計なことをしてくれたとばかりに、父さんは天井を見上げた。その視線の先では、おばあちゃんが二階の物置を探っているはずだ。40年ちかくも前の、父さんが小学生だったころの通知表は、いったいどんなものだったんだろう。

昔の小学校に想いを馳せていると、階段を下りる足音がしておばあちゃんが戻ってきた。「あったわよ、通知表。それからその時の教科書も一緒に入っていたから持ってきてやった」

おばあちゃんが広げてくれた通知表には、国語や社会、算数、体育なんかについて、AやBがたくさんならんでいる。

「本当はAからCまであるんだぞ。でもまあ三段階評価という点では、今の通知表と同じだな。A、B、Cが、それぞれ今の◎、○、△にあたるということだ。今みたいに絶対評価じゃなかったけどな」

「絶対評価って？」

「ああ、今はきちんと理解できてたら、みんなに◎がつくだろ？ 昔は①相対評価ってって、クラスでAが何人、Bが何人って決まっていたんだ。だからできる子ばかりのクラスだと、点数が良くてもAがもらえない、なんてこともあったな」

見られても恥<sup>は</sup>ずかしくない内容だったことに安心したのか、新しいスイカに手<sup>の</sup>を伸ばしながら父さんが笑う。

「おじいちゃんのころはどうだったの？」

「通知表は甲<sup>こう</sup>、乙<sup>おつ</sup>、丙<sup>へい</sup>、丁<sup>てい</sup>で表していたんじゃないかな。とはいっても勉強どころじゃなくて、甲をもらえたのなんて体<sup>たい</sup>錬<sup>れん</sup>くらいのもだったんだけどな」

体<sup>たい</sup>錬<sup>れん</sup>ってなんだろう。疑問に思っている僕<sup>ぼく</sup>の表情<sup>へいしやう</sup>に気がついたのか、おじいちゃんは昔の学校について説明<sup>せうめい</sup>をしてくれた。

「体<sup>たい</sup>錬<sup>れん</sup>というのは今でいう体育<sup>たいいく</sup>だな。男子は上半身<sup>かみみ</sup>裸<sup>はだか</sup>で乾布<sup>かんぷ</sup>摩擦<sup>まさつ</sup>をしたし、剣道<sup>けんどう</sup>や銃剣術<sup>じゅうけんじゆつ</sup>もあったんだ。そうそう、射撃<sup>しゃげき</sup>や突撃<sup>とつげき</sup>の訓練<sup>くわんれん</sup>もやったし、行進<sup>こうしん</sup>なんかは足並み<sup>あしなみ</sup>がそろわないと何回でもやり直しをさせられた。大変<sup>たいへん</sup>だったよ」

僕<sup>ぼく</sup>らも運動会<sup>うんどうかい</sup>の練習<sup>れんしゅう</sup>で行進<sup>こうしん</sup>をすることはあるけど、それとは比べものにならないくらい厳<sup>げん</sup>しかったんだらう。同じような行進<sup>こうしん</sup>の練習<sup>れんしゅう</sup>ひとつとってみても、おじいちゃんの時代<sup>じだい</sup>と今<sup>いま</sup>とでは、ずいぶん<sup>ずいぶん</sup>と違<sup>ちが</sup>ってきている。

時代<sup>じだい</sup>によって小学校<sup>しょうがっこう</sup>は変わ<sup>かわ</sup>ってきているんだ、ということ<sup>こと</sup>を言うと、おじいちゃんは大きく<sup>おおい</sup>うなずいた。

「そうだね。昔<sup>むかし</sup>は体<sup>たい</sup>錬<sup>れん</sup>や勤勞<sup>きんらう</sup>奉仕<sup>ほうし</sup>に時間<sup>じかん</sup>をとられたりして、授業<sup>じゆぎょう</sup>の時間<sup>じかん</sup>を満足<sup>まんじつ</sup>にとることもできなかつたし、校舎<sup>がう</sup>も木造<sup>きぞう</sup>だったし、今<sup>いま</sup>とはだいぶ違<sup>ちが</sup>っているだらうね」

ところが、父<sup>ちち</sup>さんは「本当に<sup>ほんとうに</sup>そうか？」と、別<sup>べつ</sup>の見方<sup>けんぱう</sup>をした。

「意外<sup>いがい</sup>と変わ<sup>かわ</sup>っていない部分<sup>ぶぶん</sup>も多いんじゃないかな。②毎週<sup>まいしゅう</sup>決まった日<sup>ひ</sup>に休むということなんかも、明治時代<sup>めいし</sup>に小学校<sup>しょうがっこう</sup>が始<sup>はじ</sup>まってから広<sup>ひろ</sup>まったことだろ。学校<sup>がっこう</sup>でみんな<sup>みんな</sup>で歌<sup>うた</sup>を歌<sup>うた</sup>う、体操<sup>たいそう</sup>をする、運動会<sup>うんどうかい</sup>をする、決<sup>き</sup>まった時間<sup>じかん</sup>に登校<sup>とうがう</sup>する……。学校<sup>がっこう</sup>はいろいろなこと<sup>こと</sup>を新たに<sup>あらたに</sup>持<sup>も</sup>ち込んだんだ。それ<sup>それ</sup>って今<sup>いま</sup>も昔<sup>むかし</sup>も変わ<sup>かわ</sup>らないこと<sup>こと</sup>じゃないかな」

「学芸会<sup>がくげんかい</sup>とか、修学旅行<sup>しゆがくりょこう</sup>とか、卒業式<sup>そつぎょうしき</sup>とか、そういうもの<sup>もの</sup>って、おじいちゃん<sup>おじいちゃん</sup>のころ<sup>ころ</sup>からあつたの？」

「卒業式<sup>そつぎょうしき</sup>はあつたけど、修学旅行<sup>しゆがくりょこう</sup>どころ<sup>どころ</sup>じゃなかったなあ。おじいちゃん<sup>おじいちゃん</sup>たちは(あ)疎開<sup>そかい</sup>をして<sup>して</sup>いたから<sup>から</sup>ね、あれ<sup>あれ</sup>は大変<sup>たいへん</sup>だった」

「いつ戻<sup>もど</sup>ってきたの？」

「1945(昭和20)年の11月<sup>じゅういちがつ</sup>だね。でも戻<sup>もど</sup>ってきてもしばらくは授業<sup>じゆぎょう</sup>もなくて、やがて学校<sup>がっこう</sup>も大きく<sup>おおい</sup>変わったんだ。教科書<sup>きょうこしょ</sup>を全部<sup>ぜんぶ</sup>持<sup>も</sup>って集<sup>あつ</sup>まるように言<sup>い</sup>われて、行<sup>い</sup>ったら『先生<sup>せんせい</sup>が言<sup>い</sup>うところ<sup>ところ</sup>を墨<sup>すみ</sup>で塗<sup>ぬ</sup>りつぶすように』って指示<sup>しじ</sup>されてね。それ<sup>それ</sup>までの教科書<sup>きょうこしょ</sup>はほとんど使<sup>つか</sup>い物<sup>ぶつ</sup>にならなくな<sup>な</sup>ってしまった」

墨<sup>すみ</sup>塗<sup>ぬ</sup>りについては歴史<sup>れきし</sup>の本<sup>ほん</sup>で読<sup>よ</sup>んだこと<sup>こと</sup>があつたけど、まさか自分<sup>おのれ</sup>のおじいちゃん<sup>おじいちゃん</sup>が体<sup>たい</sup>験<sup>けん</sup>して<sup>して</sup>いたとは知ら<sup>し</sup>らなかつた。

「勉強<sup>べんきやう</sup>する内容<sup>ないよう</sup>が変わ<sup>かわ</sup>ったってこと？」

「大きく<sup>おおい</sup>変わったね。そうい<sup>い</sup>えば、社会科<sup>しやかい</sup>では病<sup>びやう</sup>気<sup>き</sup>について<sup>について</sup>も勉強<sup>べんきやう</sup>したな」

「えっ、社会科<sup>しやかい</sup>で？」

「そうだよ。新しい教科書<sup>きょうこしょ</sup>に『外<sup>と</sup>から帰<sup>かえ</sup>ってきたら、手<sup>て</sup>を洗<sup>あ</sup>ったり口<sup>くち</sup>をゆすぐ習慣<sup>じゆかん</sup>をつけましよう』なんて書<sup>か</sup>かれていたりしたんだ。当時<sup>たうじ</sup>、病<sup>びやう</sup>気<sup>き</sup>は社会問題<sup>しやかい</sup>とも言<sup>い</sup>えたから<sup>から</sup>ね」

同じ<sup>おな</sup>じ社会科<sup>しやかい</sup>でも、詳<sup>くわ</sup>しくみ<sup>み</sup>ると取<sup>あ</sup>り扱<sup>あつか</sup>っている内容<sup>ないよう</sup>は時代<sup>じだい</sup>とともに<sup>とともに</sup>変わ<sup>かわ</sup>っているのだらう。社会<sup>しやかい</sup>が変<sup>へ</sup>わるから、それ<sup>それ</sup>に合<sup>あ</sup>わせて社会科<sup>しやかい</sup>の中身<sup>なかみ</sup>も変<sup>へ</sup>わる。言<sup>い</sup>われてみれば<sup>みれば</sup>あたりまえ<sup>あたりまえ</sup>のこと<sup>こと</sup>だけど、なんだか新鮮<sup>しんせん</sup>だ。

「昔<sup>むかし</sup>の地図帳<sup>ちずちやう</sup>を見ると、世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>がどう<sup>どう</sup>変わ<sup>かわ</sup>ったのかわかり<sup>わかり</sup>やすいよ。面白<sup>おもしろ</sup>いから取<sup>と</sup>ってあ<sup>あ</sup>るんだ。ちょっ<sup>ち</sup>と待<sup>まち</sup>ってな」

僕<sup>ぼく</sup>の感想<sup>こうきやう</sup>にそう返答<sup>へんたう</sup>すると、おじいちゃん<sup>おじいちゃん</sup>は「よっころ<sup>よっころ</sup>しよう」と背<sup>せ</sup>もたれ<sup>たれ</sup>をつかんで立<sup>た</sup>ち上<sup>あ</sup>がり、「そろそろ<sup>そろそろ</sup>我が家<sup>わが</sup>も(い)バリアフリー<sup>ばりあふりー</sup>を考<sup>かんが</sup>えないといけ<sup>い</sup>ないな」とつば<sup>つば</sup>やきながら二階<sup>にがい</sup>の書斎<sup>しよさい</sup>から二冊<sup>にさつ</sup>の古<sup>ふる</sup>い地図帳<sup>ちずちやう</sup>を持<sup>も</sup>ってきた。

「こっち<sup>こち</sup>が、おじいちゃん<sup>おじいちゃん</sup>が中<sup>ちゆう</sup>学生<sup>がくせい</sup>の時<sup>とき</sup>に使<sup>つか</sup>っていた地図帳<sup>ちずちやう</sup>だ。見て<sup>みて</sup>ごらん」

開<sup>ひ</sup>いてみると、最初<sup>さいしょ</sup>のページ<sup>ぺーじ</sup>に世界<sup>せかい</sup>地図<sup>ちず</sup>が載<sup>の</sup>っていた(9ページ<sup>ぺーじ</sup>の地図<sup>ちず</sup>1)。今<sup>いま</sup>でも見<sup>み</sup>る地図<sup>ちず</sup>だと思<sup>おも</sup>ったけれど、よく見<sup>み</sup>ると僕<sup>ぼく</sup>の知<sup>し</sup>っているもの<sup>もの</sup>と違<sup>ちが</sup>っている。

「③今<sup>いま</sup>とはだいぶ<sup>だいぶ</sup>違<sup>ちが</sup>うんだね。知ら<sup>し</sup>らない地名<sup>ちめい</sup>がいっ<sup>い</sup>ぱいあるよ」

一通<sup>いっとう</sup>り見<sup>み</sup>終<sup>しま</sup>えると、もう一冊<sup>いっさつ</sup>の地図帳<sup>ちずちやう</sup>が気<sup>き</sup>になった。

「こっちはおまえ<sup>おまえ</sup>の父<sup>ちち</sup>さんが中<sup>ちゆう</sup>学生<sup>がくせい</sup>の時<sup>とき</sup>の地図帳<sup>ちずちやう</sup>だよ」

「よく取<sup>と</sup>ってあつたなあ……」

今<sup>いま</sup>度は父<sup>ちち</sup>さんが呆<sup>あき</sup>れたように声<sup>こゑ</sup>を上<sup>あ</sup>げた。

開<sup>ひ</sup>いてみると、ほとんどのページ<sup>ぺーじ</sup>がカ<sup>カ</sup>ラーにな<sup>な</sup>っていて、僕<sup>ぼく</sup>の使<sup>つか</sup>っているもの<sup>もの</sup>とそ<sup>そ</sup>んなに違<sup>ちが</sup>っていないように思<sup>おも</sup>えた。それでもど<sup>ど</sup>こか<sup>か</sup>は変わ<sup>かわ</sup>っているんだらうと思<sup>おも</sup>いながらページ<sup>ぺーじ</sup>をめく<sup>めく</sup>っていると、父<sup>ちち</sup>さんが『列島<sup>りゅうとう</sup>の交通網<sup>こうつうもう</sup>整備<sup>せいび</sup>』と書<sup>か</sup>かれた地図<sup>ちず</sup>を指<sup>さ</sup>さした。

「この時<sup>とき</sup>は東<sup>とう</sup>海<sup>かい</sup>道<sup>だう</sup>・山<sup>さん</sup>陽<sup>やう</sup>新<sup>しん</sup>幹<sup>かん</sup>線<sup>せん</sup>も博<sup>はく</sup>多<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>では行<sup>い</sup>って<sup>い</sup>なかつたし、東<sup>とう</sup>北<sup>ほく</sup>新<sup>しん</sup>幹<sup>かん</sup>線<sup>せん</sup>もでき<sup>でき</sup>てい

なかったんだなあ」

「新幹線の開通は高速交通網整備の始まりだったし、意識の上で日本列島を縮めたという点で、④日本にとって大きな節目になる出来事だったんだらうね」

父さんはおじいちゃんと顔を見合わせて懐かしそうに笑った。そして隣のページにある『国土の高度利用』という地図を見て、気がついたように聞く（9ページの地図2）。

「そういえば、今でも太平洋ベルトとか四大工業地帯って教わるのか？」

「太平洋ベルトは教わるけど、三大工業地帯って教わったよ。昔は北九州も含めて四大工業地帯だったって」

見ると、僕が知っている工業地帯の他に、⑤新産業都市や工業整備特別地域と書かれた地域が日本のあちこちにあった。今では聞かないけれど、昔はそういうものもあったんだらう。僕の習ったものとはだいぶ違っている。

しばらくそれぞれに地図帳や教科書を眺めていると、父さんが「懐かしいなあ、こんなことを昔は勉強していたんだ」と声を上げた。開いているのは父さんが五年生の時の社会科の教科書だ。

「工業とか農林水産業とか、こんなに詳しく勉強していたんだな。林業なんて今は教科書に載ってないだろ」

そんなことはなかったはずだ。ずっと前にやった授業の内容を必死で思い出す。

「⑥林業の勉強はしたよ。だけど父さんの教科書みたいに工業とかと一緒にじゃなくて、別のところで少しやっただけじゃなかったかな」

「なるほど、林業の扱い方が違うのは、1970年代と今との違いをよく示しているっていうことなんだな」

父さんは手に持っていた教科書を閉じて、「そっちの教科書は何か面白い違いとか見つかったか？」と覗き込んできた。僕の手元には歴史の教科書が開かれていた。

「僕の教科書とは詳しく扱っている人物が違う気がする。父さんの時代には、聖徳太子とか、源頼朝とか、徳川家康について詳しく書かれているんだね。でも僕が習った（う）平塚らいてうとか（え）雪舟とか近松門左衛門についてはあまり書かれてないし、雨森芳洲とか柳宗悦なんかぜんぜん載ってないよ」

「へえ、時代が変わると教科書に載る人物も変わるんだな。しかし雨森芳洲とか柳宗悦って誰だ、そんなのぜんぜん勉強しなかったぞ」

「おじいちゃんのころは乃木希典とか広瀬武夫とか軍人も多く扱われていたが、おまえらは知らんだらう。時代によって変わるんだから、知らなくても恥ずかしいことはないぞ」

それが世代の違いだと、おじいちゃんはそう言って笑った。

「そういえば最近市川房枝まで教科書に載っているって新聞で読んだな。おじいちゃんにとってみれば市川房枝なんて同じ時代に生きていた人という感覚だから、歴史上の人物だなんて信じられないくらいだ」

「いろいろな分野で女性がリーダーシップをとることも多くなってきたから、これからは歴史の教科書にも女性が増えてくるのかもしれないってことだな」

父さんが言うと、おじいちゃんが「おまえの母さんが教科書に載る日も、いつか来るかもしれないぞ」と冷やかす。

うちの母さんはアメリカに本社のある会社で、得意の英語を生かして外国の人たちと仕事をしている。とても忙しそうだけど、いつもすごく楽しそうに仕事の話をしてくれる。

父さんも働いているけど、いつも母さんより帰宅が早い。僕が保育園に行っていたころは、だいたい父さんが迎えに来てくれていたし、授業参観もいつも父さんが見に来てくれている。毎日の夕食の準備だって父さんがやることになっている。最近流行のイクメンというやつだ、と言って父さんは笑っていた。

そういえばこのあいだの運動会の時、父さん特製の弁当を食べながらクラスメイトと話していたら、そんな我が家のスタイルがみんなの家と違っていることが話題になった。聞いてみると⑦母親が家事を全部やっけていて、父親の帰宅時間が遅い家も多いらしい。

「ずいぶん忙しそうなんですものねえ」

母さんの話になってきたところで、横で聞いていたおばあちゃんが言う。

「まあね。最近は夜中に帰ってくることも少くないよ」

父さんがざらりと答える。

「わたしの時代には考えられなかった光景ね。夫のおまえが家を守って、妻が一家を支える大黒柱、って感じだもの」

「⑧家族のありかた自体、変わってきているんだよ。社会が変わってきているんだから、家族のありかただって変わって当然なんだ。夫が外で働き、妻が家を守るなんていう考え方にこだわるのはもう古いよ」

なんだか父さんがいつもと一味ちがう。ちょっとかっこいい。

確かに学校での教育内容ひとつとってみても、おじいちゃんや父さんのころとはだいぶ変わっている。社会の変化とともに、学校や、家族のありかただって変化していく。今まであまりに身近であたりまえすぎて、学校や家族について考えたこともなかったけど、おじいちゃんや父さんの時代と比較してみると、違いがよくわかる。

そう考えているうちに、おじいちゃんや父さんが過ごしてきた時代について、もっと知りたいという気持ちわいてきた。よし、夏休みの自由研究は決まりだ。おじいちゃんやおばあちゃん、父さんや母さんにインタビューして、学校のこと、家族のことをもっと詳しく聞き取り調査してみよう。

こうして夏休みを前にして、僕の自由研究の課題が決まったのだった。

〈問題文はここで終わりです〉

- 問1 下線部(あ)(い)について。それぞれの用語の意味を説明しなさい。
- 問2 下線部(う)(え)について。これらの人物はいつの時代に、何をしたのでしょうか。例にならって、それぞれ説明しなさい。
- 例) 近松門左衛門：江戸時代に歌舞伎や人形浄瑠璃の台本をたくさん書き残した。
- 問3 下線部①について。相対評価は何がわかる評価方法ですか。絶対評価でわかることとの違いを明らかにして説明しなさい。
- 問4 下線部②について。毎週決まった日に休むということは、江戸時代の社会では難しいことでした。なぜでしょうか。江戸時代に多くの人々が属していた身分やその人々の働き方を考えて答えなさい。
- 問5 下線部③について。9ページの地図1を見て現在の地図との違いを一つあげ、なぜ違うのかを当時の世界の様子を調べて説明しなさい。
- 問6 下線部④のように、その前後で社会のありかたが大きく変わったとあなたが考える戦後の出来事を以下から一つ記号で選び、どのような社会になったのか、その変化を説明しなさい。
- ア 第一次石油危機 (1973年)
  - イ 国鉄の分割民営化 (1987年)
  - ウ アイヌ文化振興法制定 (1997年)
- 問7 下線部⑤について。9ページの地図2の新産業都市は、指定された時にどのような役割が期待されていましたか。その分布に注意して説明しなさい。
- 問8 下線部⑥について。林業の扱い方が1970年代と今とで違うのはなぜでしょうか。理由を二つ説明しなさい。

問9 下線部⑦のような家庭は、高度経済成長期に都市部のサラリーマン家庭で急激に広まりました。なぜでしょうか。説明しなさい。

問10 下線部⑧について。次の表は夫婦それぞれが働いているかどうかに着目して家族数を表したものです。表を見て夫婦の働き方の変化を二つあげ、そこから読み取れる最近の社会の変化をそれぞれ説明しなさい。

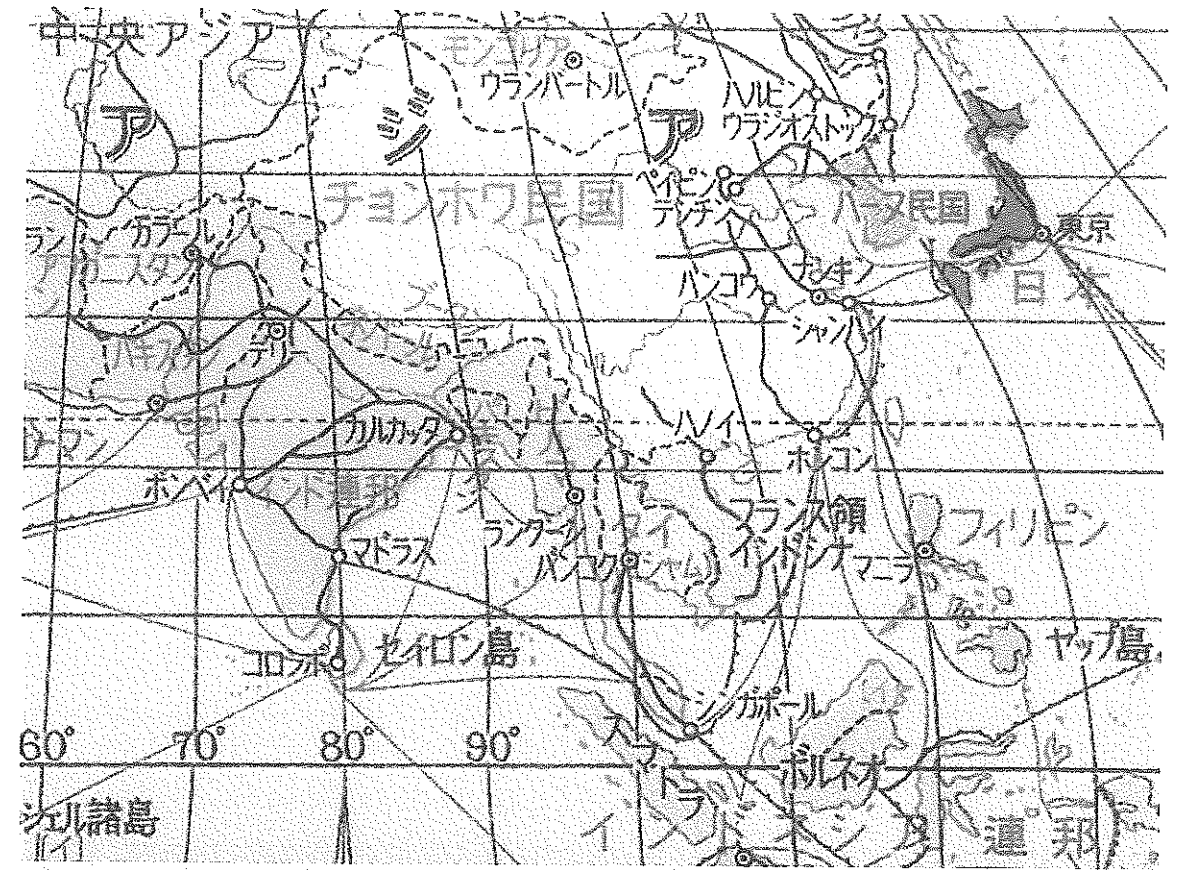
	総数	夫:働いている 妻:働いている	夫:働いている 妻:働いていない	夫:働いていない 妻:働いている	夫:働いていない 妻:働いていない
2000年	2870万	1319万	1032万	100万	417万
2012年	2944万	1321万	885万	124万	615万

総務省「労働力調査」より作成

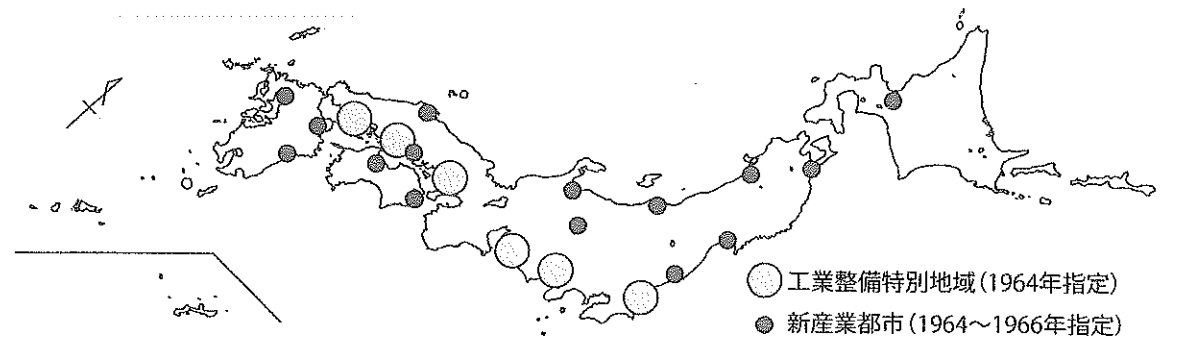
問11 この文章には、親子三世代にわたる学校体験が記されていました。

- (1) 教えられる内容はどのように変化しましたか。おじいちゃん、父さん、僕のうち二人の体験を比較し、社会の変化を考えに入れて、40字以上60字以内で説明しなさい。ただし句読点も一字分とします。
- (2) おじいちゃん、父さん、僕の時代を通じて変わっていないことは何ですか。変わっていないことを一つあげ、社会が学校に求めてきた役割を考えに入れて、変わっていない理由とともに80字以上120字以内で説明しなさい。ただし句読点も一字分とします。

<問いはここで終わりです>



地図1 1950年ごろに使われた中学校用地図の一部



地図2 『国土の高度利用』の地図

受験番号	
氏名	

(2014年度)

## 社会解答用紙(その1)

問1 (あ)

(い)

問2 (う) 平塚らいてう：

(え) 雪舟：

問3

問4

問5

問6 記号

変化

問7

問8

(整理番号)

小計

受験番号	
氏名	

(2014年度)

## 社会解答用紙(その2)

問9

<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>
---

問10


問11

(1)


(40)

(60)

(2)


(80)

(120)

(整理番号)

--

小計

--